

国際協力に民族学の知識と経験を



MATSUZONO MAKIO OGATA SADAKO

松園万亀雄・緒方貞子

(本館館長)

(JICA 理事長)

世界には一五〇を超える開発途上国があり、人口の約八割が住んでいる。そこでは「貧困」「紛争」「環境」などの問題が深刻化しているといわれる。民博は開館以来三〇年間、おもに開発途上国に関する地域に密着した知識を蓄積してきた。これらの知識を国際協力の現場に役立てるには何が必要なのだろうか。民族学の可能性を語り合う。

国際協力機構と民博

——国際協力機構（JICA）は、政府の開発援助（ODA）の中心的な実施機関として、開発途上国を中心に、世界中で国際協力活動をおこなっています。開発途上国を調査研究する機関として、民博もJICAと新しい交流ができるのではないかとということで、国際協力にかかわって、いろいろお話をうかがうことができたと思っています。

民族学という分野は文化人類学という名前でも知られていますが、国際協力とは、これまでそれほど接点がありませんが、いかがでしょうか。

緒方 民族学は必ずしも国際協力と反するものじゃないと思います。国際協力の理論的手段としての民族学ということでは整理はできていません。でも、最近接点が増えているんじゃないでしょうか。

松園 今、民博には約六〇人の教員がおりまして、ほとんどが海外で調査をしていて、それも途上国が中心です。わたし自身は一九七〇年代から主としてアフリカの調査をしています。

緒方 ケニアがフィールドだと。

松園 はい。わたしは三〇年ほどずっとケニアなどアフリカで調査をしておりますけれども、年を重ねるにつれて、日本からやって来るJICAの人やその他の援助関係者と調査地で遭遇することが多くなりました。民族学者というのは、地元はかなり長いあいだ張りついて調査をしています。現地のことばを使ってやり取りしておりますから、住民たちが生活のうえでいけば何を欲しがっているのか、というようなことがいろいろわかっていきますし、何か新しいものが導入されれば現地の社会のどこにどんな変化が生じるのか見当がつけられます。

男女間で仕事の種類がくつきりわかれていて、それを破ることがタブーにさえなっている社会では、たとえば井戸や水道ができれば、いちばん影響を受けるのは女性と子どもでしょう。水運び、炊事洗濯、家で飼っている家畜への水やりが楽になります。それにくらべたら、水道がきたからといって成人男子の行動に大きな変化はない。衛生の点からトイレを普及させるにしても、まず人びとが人糞というものをどう見ているかということを考えずに勝手に作って、「はい使って」と言っても結局、誰も使ってくれないということになりかねません。

ですから、わたしたちの調査の結果を援助の人たちに使っていただけたらありがたいと、わたしはそう思っております。それで、一九九九年にJICAから出ている『国際協力研究』という雑誌に「国際協力と人類学の接点を求めて」という論文を書かせていただきました。そのころJICAのさまざまな事業評価の報告書を拝見して、技術のこと、経済のことはよく書いていらつしやるけど、社会とか文化についての記述が非常に少ないという印象をもちました。そこで、開発の事業を進めているJICAと、いいコンタクトをもちたいなと、ずっと願っていたんです。

わたしは四年前に民博に赴任してから、民族学も、実際に目に見えて現地の人びとの役に立つようなことをもう少しやってみたほうがいいのではないかと思ってきました。それで「文化人類学の社会的活用」という機関研究を始めました。

——機関研究というのは民博全体で推進していく研究プロジェクトですね。

松園 そこにはJICAと関係の深い民族学・社会学の研究者にも参加していただいております。北欧やカナダで開発事業と民族学を含む社会科学がどういふふうな関係になっているのかということを知るために、研究者をよんでシンポジウムを開催したり、そういうことをいろいろやってきました。

文化を全体として見る視点

緒方 今のお話をうかがいまして、わたしは非常にありがたいことだと思えました。と申しますのは、わたし自身は開発という仕事をしたことがないので、むしろわたしは政治学、また歴史学の研究者でございま

すし、国連難民高等弁務官というのは、紛争とか政治的迫害によって居住地を離れざるをえなくなった人の支援でございました。そこでいちばん悩んだのは、支援しても政治的解決がなければ解決しない問題が多くあることです。紛争から逃げてきた人たちがある時点で帰れるような状況になりますと、帰っていく国における経済開発、社会開発、よりよい統治というものが必要になります。その過程で、開発機関から来る援助がもの足りないという思いは、ずいぶんもちました。そして、遅い（笑）。

もうひとつわたしは、JICAに来てから非常に興味深く観察していると言ったら大変おもしろい話なんですけども、日本の経験を相手に渡す、JICAではこういう考え方が強いんですね。特に戦後の日本の輝かしい復興というものが注目されておりますから、それを相手に技術的にもいろいろなカタチで知らせるのが大きなテーマになっているんです。ただわたしの感じでは、日本の経験をそのまま渡せるようなところはないんじゃないかと思えます。

松園 個別に特徴もありますし。

緒方 そうです。相手の国々はそれぞれの歴史、文化、風習がありますから、そのなかで日本の経験が理解できるようなカタチで、こちら側も接点を見つけていかなければならない。これはつねづね思っていることです。松園さんがおっしゃることかなりマッチする考え方と思うんです。

松園 よくわかります。

緒方 その意味でわたしは、民族学、社会学等々の研究はとても大事だと思っております。もともと難民高等弁務官時代にも、スタッフは緊急対策のため難民の避難している現場を歩き回りますけれども、時間があ



JICAの水供給プロジェクトを視察(2004年5月 エチオピア)写真:JICA



対談文中に登場する国

一九九四年にルワンダでジェノサイド(民族大虐殺)がありました。国連はそれに対応しなかったとよく言われますけど、じつはルワンダ難民というのが出てきた最初は、一九六三年か六四年なんですね。それを国際社会は二五年ほつといたんですね。対応してこなかったんです。

そのなかでも、忘れられないような光景というところ、どういうところですか。
緒方 平均、一年に三回くらい行っておりました。悪いことがあった国は全部行きましたね。
 今でも忘れられないのはルワンダを見た一〇〇万人近い人たちが移動している光景です。それはすごいんですよ。難民がゴマのキャンプにたどり着いてすぐコリラが大流行になりました。おそらくわたしがルワンダの首都のキガリからコンゴ民主共和国(ザイール)東部のゴマまでジープの隊を組んで行った最初の民間人だと思えますけども、ほとんど浅間山の鬼押し出しみたいな溶岩台地の上にキャンプをずーっと作っていかねければなりません。それはすごかったですね。

松園 そのとおりだと思います。それぞれの文化の特徴に合わせて、それを尊敬しながら対応しなければならぬことは、おっしゃるとおりです。民族学者は文化を全体として観察するように訓練されていますし、中央政府と地域との関係、さらに近隣の社会も視野に入れていきます。また植民地化の前後から現在までの歴史文書、報告書のたぐいを読むことは今では民族学調査の常識になっておりますし、一方で老人たちの言い伝えにも耳をかたむけております。

松園 アフリカでは七〇年代、八〇年代、九〇年代にないかと思えます。
緒方 そういうことを頭におくということは、共通していると思えます。

松園 先ほど日本の援助をそのまま途上国にもっていくことは適当ではないかもしれないということをおっしゃいましたけど、日本社会の場合、社会全体が進んでいるんですね。田舎の人も都会の人も少いずつ一緒に進んでいるけども、アフリカの場合は極端に言うと、同地的な部分だけが変化していて、他のところがそれについていけないということがあるだろうと感じています。日本の経験も役立てればいいんですけども、そももいかないこともいっぱいあるだろうと思えます。



緒方 貞子 (おがた さだこ)
 1927年東京生まれ。米国ジョージタウン大学で修士号、カリフォルニア大学パークレー校で政治学博士号を取得。1976年に日本人女性として初の国連大使となり、国連人権委員会政府代表、上智大学外国語学部長を経て、1991年国連難民高等弁務官に就任し、2000年末に退任。その後、人間の安全保障諮問委員会委員長などを務め、2003年JICA理事長に就任。著書は『紛争と難民—緒方貞子の回想—』(集英社)、『私の仕事』(草思社)ほか多数。

るにつれて、変化のスピードが非常に早くなっている。今現在、アフリカにいる人たちのおじいさんたちがどういう暮らしをしていたかというところ、たぶんまだ毛皮を着ていたんですね。
緒方 動物からとったままのね。
松園 それをなめして着ていたわけですね。そしてウシを飼って、ヒエが何かを作って、もちろんプラスチックのものはないし、金属製のものがあつたかどうか、そういう暮らしをしていたのがおじいさんたちの世代ですよ。今はどうかというと、インターネットを使っています。

ケニアのナイロビには十数年前、手数料をはらってファックスを送信してくれる店がたくさんあったのですが、それが今では全部店じまいしてインターネット・カフェに姿を変えています。
緒方 アフリカの場合は、段階を飛び越えて変わっていきますね。

松園 先ほど日本の援助をそのまま途上国にもっていくことは適当ではないかもしれないということをおっしゃいましたけど、日本社会の場合、社会全体が進んでいるんですね。田舎の人も都会の人も少いずつ一緒に進んでいるけども、アフリカの場合は極端に言うと、同地的な部分だけが変化していて、他のところがそれについていけないということがあるだろうと感じています。日本の経験も役立てればいいんですけども、そももいかないこともいっぱいあるだろうと思えます。
 わたしがアフリカの農村で暮らしていて、よく考えて

松園 独立してからですということですか。

緒方 そうですね。独立する前は多数派のフツ族が少数派のツチ族に虐げられていた。社会革命でこれが逆転するんです。その過程で難民が始めました。

松園 あとソマリアはいかがでしたか。

緒方 ソマリアの内戦はひどくなったり軽くなったりで、ずいぶん長い付き合いになりました。スーダンには難民がかなりいましたけども、わたしは二回くらいしか行ったことがないんです。

わたしはフィールドの研究者じゃなかったんで、一カ所に長期にわたるわけではないんです。ただフィールドにいる人の話を直接聞いて、どうするか決めなきゃいけないですよ。わたしのような仕事というのは、どの職員をどこに配置するのかを決めると、半分仕事は終わるようなものです。マネージメントの仕事というのは、いい人事にかかるとよく言われましたけれど、それと現場で話を聞いてものを決めていかなきゃいけない。

松園 緒方さんから見ると、わたしたちの仕事はまだろっこしいと思われるかもしれませんが(笑)。

緒方 民族学は、長いタイムスパンで考える学問ですから。

松園 難民に対する緊急人道支援と、JICAがこれまでやってきたような開発援助は少し違うなという印象をもっております。生活基盤を根こそぎ奪われて住むところもないという人々と、伝統的な生活基盤があつて、そのうえで生活環境を改善したいという人たちへの支援の切迫感と方法は、当然違ってくると思います。JICAはもう少し長いタイムスパンで、問題を見つけないとというのが重要になってくるんじゃないでしょうか。住民たちが欲しがっている援助と、援

いたことがあります。それは、比較的に変化の波からとり残されていて、伝統的な生業のかたちを維持している人たちに、日本の農村、漁村で暮らしてきたふうの人たちの知恵と技術を直接伝えられないかということなんです。JICAにはシニア海外ボランティア制度がありますから、すでにそうしたことは一部分始まっているわけなんです。これまで外国暮らしをしたことのない、日本語しか話してこなかった、しかし自然のなかで野菜や果樹栽培、漁業、畜産、木工などの技能を身につけてきた熟年以上の人たちが、そうしたところにとんとん出かけるようになって欲しいなと思っています。いわば、庶民レベルの知恵の交流なんです。



小さな時から家事の手伝いをする(2002年8月 ケニア)
 写真: 松園万竜雄

アフリカから考える

緒方さんはアフリカには国連難民高等弁務官時代にも何度も行ってらっしゃると思うんですが。

助する側が考える優先順位が違うということは往々にしてありうることでしょうから、その点は慎重にしなければなりませんね。だからこそしっかりと事前調査が必要なんだろうと思います。現地の人間のことをよく知っている研究者は、住民と援助側とのあいだに立つ、いわば文化の仲介者、ブローカーのような役割を果たすことになるのかもしれない。

一九九〇年代くらいから欧米でもそうなんですけど、日本のODAもかつてはインフラ中心の援助だったのが変わってきました。社会開発とか、人間開発とか、草の根、住民参加ということがキーワードになった。

緒方 教育とか医療とか、そういうことを始めたわけなんです。また、非常に長くやってきたのは農業開発じゃないですか。アジアでは食糧問題がありましたね。

JICAのアフリカに対する事業は、かなり広がりましたね。ここ数年ものすごく広がった。自負するわけではないんですけど、わたしがJICAに来たときに驚いたのは、JICAの事業費のなかで、アフリカの占める割合は、一五パーセントでした。全部のアフリカを入れてですよ。アジアは四〇パーセント近かった。それはあまりにアンバランスだとわたしには思えたわけなんです。アジアの国はずいぶんよくなってきましたから。

松園 現在は。

緒方 ニーバーセントです。ただお金をあげるわけではありませぬ。事業予算を増やしていくということは、さまざまな事業を増やすわけですから、相当な努力の結果です。なんとかそこまでもってまいりました。

松園 緒方さんはいろいろなところでアフリカにはインフラが必要なんだと言っておられますね。

これまでの日本の政府開発援助はアジアを中心に展開され、しかもインフラ支援が中心だったので、いろいろ

ると批判もありました。しかし、アフリカについては他の地域とくらべてもインフラ整備がはるかに立ち後れているので、どうしてもやらざるをえないということでしょうか。

緒方 必要です、それはアフリカ側が要請してくるんです。そうしないと経済が動かない。貧困という問題については貧困層に対してのチャリティ、慈善活動があつてそれが少し進んでウエルフェア、福祉というアプローチで進んでいくけど、自分たちの力で自分たちの生活をよくするためには、やっぱり経済力をつけなければならぬ。そのあたりになると、いくらかまもった予算がないと動かないということじゃないでしょうか。アフリカを援助の中心におくのが近年の世界的な情勢だと思えます。

松園 アフリカで先端的な工業製品が作られて、それが他の国々に輸出される時代というのはなかなか時間がかかるでしょうね。

緒方 時間はかかるかもしれませんが、さつき松園さんがおっしゃったようにITに対する関心がたいへん高くなってきている。IT関係の援助を要請している国が去年一年のうちに五カ国ぐらいいりました。

ギャップは出てくるかもわからないですよ。それは今まで十分用意がなかったからいろいろなかたちで組み直さなきゃいけない。

松園 今まで日本の国際協力と民族学との接点が少ない理由に、人間や社会を援助の中心においていなかったことがあるだろうし、援助関係者が現地でも多くの住民と直接に頻りに接触することがあまりなかったからだろうと思います。

もうひとつ、アフリカの民族学の研究は、貧しくてもみなさん必要なものはわけ合つて暮らしているような

緒方 そうでしょうか。

松園 協力隊を終えた方が民族学を勉強するというケースも結構あります。

緒方 民族学だけに限ったことではなく、協力隊をやめた方がいろんな勉強をされています。アフリカについて申しますと、かなりの協力隊出身者がJICAの専門家になっていきますね。アジアはいろんな学会やいろんな方がたくさんいらっしゃるから、必ずしも協力隊がその後の専門家の中心とは言えない。

松園 最近ではシニア海外ボランティアの制度ができてりして、国際協力について日本でも関心が深く、広がってきています。わたしは開発援助や国際協力に関心がある大学院の学生たちがJICAで支援していただいて、一年くらい海外の開発に関連した調査をして、それで博士論文を書くとか、そういうシステムがあるといいなと前から思つておりました。今はJICAインターンシッププログラムもありますので、院生たちもそれに近いことができるようになりました。

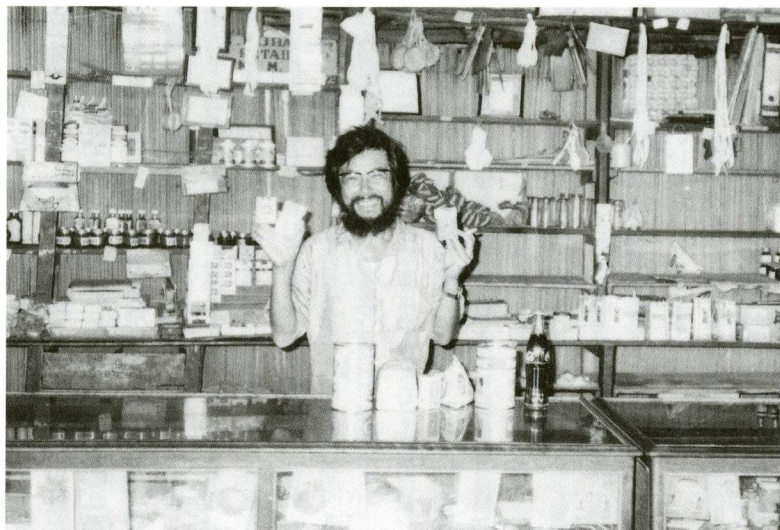
緒方 JICAがするということよりも、JICAと連携して大学が、そういうような措置をとろうとしている動きはすでにありますね。

松園 国際協力の場合、NGOがアフリカをはじめ世界中で活躍していて、日本からも若い人が参加している。JICAはNGOとのネットワークというのはすでにおもちゃです。

緒方 ネットワークとまで言えるかどうかはわかりませんが、せめてNGOの方との連携というものをもう少し組織的にしなければいけないこと、東京の広尾に「地球ひろば」というのを作りました。NGOとの対話やNGO活動のサポートとともに、途上国の暮らしの現状や、地球が抱える問題、国際協力の実際などを、写

平和な村が中心だったということがあると思います。
緒方 よく言うんですけどね、みんなが同じくらい貧乏じゃなければ問題ないんです。格差ですね。いろんな意味での格差が問題です。

松園 わたしも感じますよ。アフリカの農村部で何が起こっているかという、朝起きて夜寝るまでみんな同じような生活だった。行動パターンが同じだったのがだんだん変わってきている。なかにはいい農産物をたくさん作って学校給食に売って、お金がたくさん入ってきている人たちもいる。そういう人なんかいちは



村の調査で、時折キオスクの店番もしていた松園(1977年10月 ケニア)写真:松園万亀雄

真・映像・実物資料などで展示するコーナーを作りました。展示のあり方も、モノをただ置いておくということから、動く展示に抜本的に変えましたので、反応はいいようです。

松園 民博と似たようなことをやっていらつしやる笑。
緒方 去年の四月にオープンしまして、一年に七万人の利用がありました。

JICAの他の分野と比べるとものすごく広がりがある早いですね。

松園 そういう展示を考える方がJICAにいらつしやるのでしょうか。

緒方 担当者に愛知の「愛・地球博」を見に行つてくださいとわたしと言つたんです(笑)。JICAも外でときどき博物館などの展示の技術指導もいたしております。

松園 緒方さんはご存じかどうかわかりませんが、JICAの大阪センターと民博とのあいだで毎年おこなっている事業があります。途上国から博物館員を招いての研修を民博が委託しております。

緒方 そうですか。ありがとうございます。
松園 それが始まったのは一九九三年ですから、もう十数年続いています。すでに百数十人が経験を積んで、各地の博物館で活躍されています。民博で研修を三カ月間みっちりやるんですよ。展示の仕方、写真の撮り方、モノを送るときに梱包の仕方、保険のかけ方まで。トレーニングを受けた人たちが国へ帰って、自分たちが先生役となって教えている。JICAと民博の訓練した人たちが先生になって、今は孫たちができつつある。

民博も三〇周年を機会に、新しい構想を取り入れて展示変えをしようと考えています。その際、これまでの

ん最初に携帯電話を使い始めるわけです。今までみんな同じように貧しかったところでお金持ちとそうでない人が出てきている。その結果、教育の程度に差が出てきているということもありますね。

博物館にかかわる国際協力

JICAの事業のひとつに青年海外協力隊というのがありますね。

緒方 わたしはJICAのことは知らなかったけれど、協力隊のことは昔から知っていました(笑)。
—— 今JICAのなかで協力隊の位置付けというのはどのようになっていますか。

緒方 それはたいへんに複雑な質問です。

今協力隊員がだいたい二三〇〇人ぐらいい、いろんなところにボランティアで行っているんですけど、元々は日本の青年の訓練の一端として始まったんですね。JICAの仕事の開発援助と、それがどうリンクするかということについて、つめた議論があつたわけじゃないんだと思つてます。このころはJICA全体の事業ということも合理的にいろいろ整理し始めたなかで、協力隊についても、あくまでもボランティアですが、関連づけができるところは関連づけしていくというような傾向ができています。

世間一般、それは監督官庁も含めてですけど、成果というものを非常に問われるようになりました。

松園 昔、アフリカでまれにしか出会わない日本人はだいたい協力隊の人でした。最初は一九七四年のエチオピア。天然痘撲滅のためにワクチン注射をしまわる青年たちがいて、お世話になった。彼らの体験談は、とても面白いし、こちらも勉強になりましたよ。



JICA「地球ひろば」内にある体験ゾーンで、スタッフから途上国の子ども1日について説明を聞く子どもたち(2007年3月)写真:JICA

博物館研修でつちかてきた海外の人脈がたいへん役に立っています。世界の各地域の展示について、その地域の博物館関係者の意見を十分に聞くことのできるチャンネルができていくからです。民博にとつても、これは大きな財産です。

緒方 ただ一般的にアフリカの博物館は貧弱ですね、本当に。

松園 博物館はお金がかかりますから。

緒方 やはりどちらかというと、モノで伝えるんじゃなくて物語での伝承というのがアフリカでは重要じゃないでしょうか。

松園 コミュニケーションのいろんな媒体のなかでも口頭伝承はひじょうに大事なものです。文字の文化じゃないところもたくさんあります。アフリカの博物

館には独自の展示の仕方があると思います。

モノの展示や文字によるパネル説明のほかに、語り、動画、静止画像、パフォーマンスをたくさん取り入れるといいてですね。ケニアの地方の博物館でも教育や啓発に果たす博物館の役割は、強く認識されてきているようです。

国際協力を志す若者へ

松園 国際協力に話を戻しますと、緒方さんは日本人はもつとしっかり援助したほうがいいと。

緒方 日本の方は現地に行ってみないとわからないと思うんですね。そういうなかで国際的にもつとつながらってほしいと思います。わたしは何もJICAの人がいちばん最初にいちばんたいへんな状況のところに行けって言うていっているのではないですよ。それは餅は餅屋と言っんですか、専門性もあるし。ただ、いちばんひどい人道的な危機のなかから、次の段階に移るときに早く出て行って手伝ってあげたらいいと思います。

松園 民族学も、そちらのほうへも広げる必要があるんじゃないかなと。

緒方 わたしは緊急事態のときに研究にいらっしやる必要はないと思いますけども。

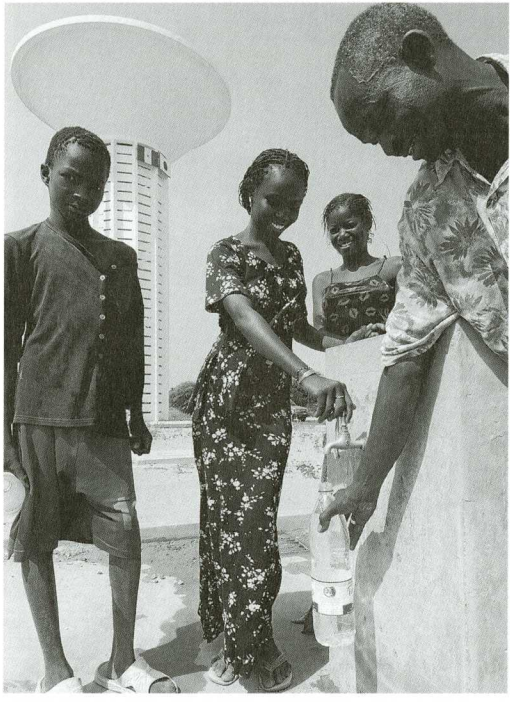
ただ、紛争じゃなくても、いろんなところの文化体験みたいなものですよ。それは教えていただけるとずいぶん早くに援助にかかれる。こういうときにどういこうとをあげるのがいちばんいいか、通じるかという民族学の知識がずいぶん役に立つんじゃないでしょうか。

松園 ODAでやっている大規模なインフラ援助に対しては、マクロ経済学が重要な部分というのは、さつき餅は餅屋とおっしゃいましたけど、わたしたちの分野ではなかなか難しいだろうと。むしろ小規模の橋

なるものですね。

緒方 それから、一九八〇年代に日本がセネガルで見事な給水塔を建てました。独立採算で運営できるように、水管理組合を作って水道料金を集めたんですね。その集めたお金の幾分かを貯金しておいて、修理に使い、必要があれば社会活動にも使う。それは村の女性たちが中心になってやりました。たいへんインプレッシブな成果でしたね。そして西アフリカの女性はみなきれいで見事な服装で水汲みに行きますけども、ちゃんと小さな手帳をもって、それにつけていましたよ。

松園 そういう話を聞くとほつとします。うれしいですね。水を使う仕事は、だいたい女性の仕事になっていきますから、女性中心でうまくいったんですね。協働組合や頼母子講など、女性が中心になってやっているもののほうが、まとまりがよく成功率が高いという事例をわたしも知っています。男女混成チームのなかで女性の活力、能力を發揮してもらおうというのは、今後のアフ

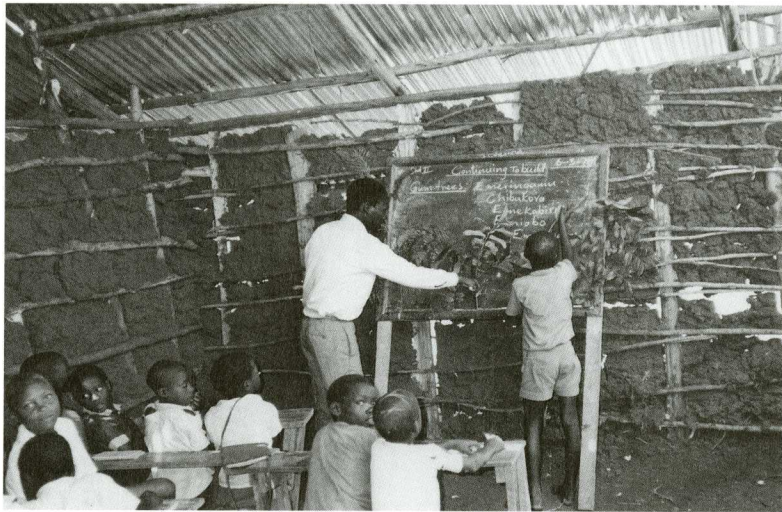


村の給水塔と、近くの共同水道から水を汲んでみせる村人たち (2005年11月 セネガル) 写真: JICA

をかけるとか、井戸を掘るとか、女性や子どものために支援をしていくとか、小学校や中学校の問題とか、つまり地元で展開されていることは、わたしたちはよく見ていますので、そういうもので役に立てればいいなと思います。

避妊について援助するにしても、たとえばコンドームを広めることはむずかしいです。地域の事情を押さえておかなければうまくいきません。

病院や保健所に行けば外国から支援物資で入ってきたコンドームを無料でもらえますが、そこまではパス



村の小学校。親たちが資金を出し合って作ったものがもともとなっていることが多い (1977年8月 ケニア) 写真: 松園万亀雄

リカ社会にとつても大きな挑戦になりますね。

—— 今日のお話でいくつか接点が見出された気がするんですが、国際協力を志す若者へのメッセージがありましたら、緒方さんのほうからお願ひできますか。

緒方 国際協力を志す若い人たちは多いだろうと思うんですね。協力隊の志望者も多いですし、JICAに採用されたいというかなりの人たちがいて、ありがたいことなんですけども。わたしは若いときの勉強は、多様なほうがいいと思うんですね。

すぐに役に立たなくていいんです。学生は基礎的なものを大学で学んで、あとは現場でそれに合わせていくというのがいいと思います。

松園 わたしも今のお話に同感で、基礎的な研究を十分にやっていないと応用もきかないと。

緒方 そつですよ。

松園 ですから、開発、開発といきなり開発人類学をやるよりも、まずはきちんと基本的な調査をやる。そつするとか何をやらなきゃいけないかということがわかるし、住民が何を望んでいるかということもわかる。そこに援助の手助けをするところが、見えてくるというふうにわたしは思っています。

緒方 どういう学問体系を大学で勉強したら国際的に役に立つ仕事につけるかと聞かれることがあります。国際関係論を専攻したらいと思っっている人が多んですけども、わたしはたぶんそれは間違っていると思っます。国際関係論というよつな学際的な分野より、もつちよつと専門性の高い

に乗らないと行けないし、半日仕事になる。どんな小さな村にも小さなキオスクがありますから、そこで手数料をとつて手渡せばいいと思っただけですが、これは実現が不可能だとわかりました。誰がコンドームをもらいに来たか村中にすぐにはばれてしまっし、第一キオスクの経営者もそんなものは扱いたくないと言っます。

また、あるクリニックでは、男女を対象に避妊の説明会を定期的に行っただけですが、男性がひとりも来ない。それで、わたしも意見を言わせてもらっつて、男女性別に、別の日にやるようになって男性が参加してくれるようになりました。

緒方 なるほど、そつですよ。

わたしたちも、つねに村の生活に焦点をあてています。たとえば、モザンビークというところでは一九九〇年代に一八〇万人ぐらゐ難民が帰還したんですけども、もともとどのようなかたちで援助していたかというところ、彼ら難民に食糧の何カ月分かのチケットを与えて、とりあえずの台用品を渡してお帰りのさいにやっつていたんです。それが大量に難民が帰っつてくる事態が起りましてね、それじゃ役に立たないと。それでみんなが工夫してやりだしたんですけども、帰っつていく村に、学校と医療センターと水ですね、ウォーターポイントを作っつていっつたんです。そうすると帰つた人たちが、コミュニティ・ライフを開始できるんです。そういう実験をやりましたのはカンボジアが最初ですけど、おそらく村々の生活によってはどこにおくとか、何を中心にするのか違っただろうと思っつたんです。そこまではわたしたちにはわからないのですが、多くの場合はこの三つのポイントをあわせました。

松園 学校とクリニックと水。生活のいちばん基本に

学問を大学のときにはしておいたほうがいい。

松園 それと、緒方さんがつねつねおつしやっつている現場を見ろということ。わたしは旅行のなかで、一日か二日、足をとめて現地のふつ々の民家のをそかせていただいて、周りの畑も見て、家族の暮らしぶりをせむ見たり聞いたりしてほしいと思います。

緒方 もちろんいろいろなところに旅行してみてください。

難民高等弁務官時代のある時期、「キャンプ・サダコ」といっまして、学生、あるいは社会人なんかも含めまして、二カ月ぐらゐの体験ボランティアをのつて難民キャンプで働いてもらったことがあるんです。それはとても大きい経験のようでした。受け入れるほうは忙しいので必ずしも評判がよかつたわけではないんですが。

松園 今は経済的にも日本は一段とよくなつたので、民族学者も短期間で行つたり来たりするようになった。フィールドワークのやり方も、自省もこめて言っつたんですけども、かなり変わつてきました。最近では、必ずしもいい方向に変わつていっるとはわたしは思っつておりません。

二〇代、三〇代の若いときの最初のフィールドワークは、これという狭いテーマは決めないで、異人としての自分が徐々に人びとに受け入れられていく過程を体験し、そのなかで社会の全体を断片的にでもいいから少しずつ試行錯誤しながらつかんでいくことをやっつてほしい。その社会にとつての重要な研究テーマをしほつていくのは、それからのことですよ。ですから若い人はかなりの長期間どこかにべつたり張りついで、地元の人々の生活を見てほしいと思っつています。

—— 今日、たいへん有意義なお話をありがとうございました。 (対談進行/池谷和信 本誌編集長)